日本医学図書館協会のあゆみ (3)

History of the Japan Medical Library Association (3)

東京医科大学図書館

菅 利 信*

日本医学図書館協会は昭和52(1977)年に創立50周年を迎えるがこの半世紀にわたる年代の中で昭和40~50年はどのようなあゆみであったろうか。その事業内容は、進歩の激しい内外の医学情報に対してどれだけ適応してきたのか、或いは何等の対応策もなくあゆみを続けてきたのか、過去10年間を振り返って述べてみたい。この10年間に前半、後半に分けると前半は日本医学図書館協会の高度の成長期であり、かつ医学図書館の建築の盛んな年代であった。後半は余り変化なく安定政権のようであるが大きな変化は加盟館の増加即ち、新設の医科大学図書館の加盟であろう。昭和40年当時、加盟館数50館、準会員8館、賛助会員11社という数字は比較的事業のおこないやすい規模であったが、昭和51年12月末では加盟館数85館、協力会員1館、賛助会員25社の規模に発展している。しかし規模が大きくなっても昭和40年当時から盛んに問題になっていた加盟館各館の格差は当時とほとんど現在も変わっていない。この問題は医学図書館員だけの努力だけで解決する問題でなく各機関単位が努力するとともに、日本医学図書館協会自体も強力な団体に成長しなければ解決することは不可能であろう。

1 昭和40~43年時代(高度成長期の名残り)

この4年間だけなぜ強調するかといえば、この時代は当時日本医学図書館協会を強力なリーダーシップのもとに先進国の医学情報に「追いつき、追いこせ」の合言葉で事業をおこなった当時の理事の方々の最後の時代である。この時代の世界的な動向は Biomedical Communication Network と機械化の胎動であった。このような動向の時代に幕をあげた昭和40年は、国内では、全国的な学園紛争の渦にまきこまれながらも、日本医学図書館協会の事業内容は大きくのびていた。従来からの米国の

National Library of Medicine に対する複写依頼のほかに、新たに American Dental Association に対しても複写依頼の道を開き、国内にない医学・歯学文献入手の実現、日本洋書輸入協会との雑誌購入調査についての座談会、日本科学技術情報センター(JICST)の医学情報委員会における活躍、テレックス導入体制の確立、「日本自然科学雑誌総覧」(東北区)、「医学雑誌総合目録欧文編第5版」(大阪区)の刊行、等がある。その間昭和42年には久留米大学医学図書館で開催された第38回総会時に創立40周年記念式典をおこなっている。海外に目を転じてみると、1969年5月アムステルダムで開かれた第3回国際医学図書館会議には、裏田(事務局長)松村(慶応)細川(金沢大)菅(東医大)が参加しており、その時に裏田事務局長が交渉した Adverse Reactions Titles の加盟館一括購入は当時としては画期的な交渉であった。以上のような事業内容を見ると日本医学図書館協会の華々しい事業もこの時代がピークであったように思われる。

2 昭和44~50年時代(低成長期の始まり?)

昭和44年に入ると成長期時代の理事の大幅な交替があったが事業は引き続き着実に実施されてきた。この時代のもっとも大きな変化は加盟館の増加である。昭和40年当時の加盟館数50館から昭和51年12月現在の85館という加盟館数は事業内容にも大きく影響を与えていることがこの時代の事業を見ればわかる。加盟館が増加しても加盟館間の格差はほとんど解決されていない。この時代は中央事務局制度の確立であろう。大学図書館に長い間間借状態であった中央事務局を独立させたことである。又準会員制度を廃止してすべて正会員に昇格させたこと、これは現在問題となっているが当時としては最良の方法であったろう。渉外関係では米国の National Library of Medicine の館長補佐 Corning 女史との懇談会、英国

* Toshinobu SUGA : Tokyo Medical College Library

の British Library Lending Division の Barr 博士との懇談会、その他米国の Medical Library Association の海外研修生として日本から初めて本田(国がん)が合格し渡米した。また韓国医学図書館協議会から第45回岐阜大学の総会に出席されたことぐらいであろう。しかし協会の大きな財源になっている刊行物は「医学雑誌総合目録と文編第5版」(関東区)を始め、長い間刊行を望んでいた「使い方シリーズ」の第1集「Index Medicus の使い方」(松村多美子)第2集「Excerpta Medica の使い方」(今村慶之助)が相ついで刊行された。また相互貸借業務に不可欠な「相互貸借マニュアル」も刊行されたが50年記念にふさわしい「医学雑誌総合目録欧文編第6版」が昭和52年9月に完成する。このほか会則の中に新たに協力会員制度が設けられ、第1号会員として財団法人国際医学情報センターが入会している。暗い面とまではゆかないが、沖縄の琉球政府立医学図書館が沖縄の本土復帰とともに解体され加盟館の中から消えたことであろう。

3 反省

日本医学図書館協会の一般的な情勢としてのこの10年間、うち最初の4年間は強力な体制であった昭和35～40年までの名残りであり、残りの6年間は、内外の医学情報に対して余り積極的でなかったように見うけられる。即ち、強力なリーダーシップをとる理事がいなかったことと、理事が頻繁に交替したことも原因があるようである。また、情報の先進国に追いつき追いこせの合言葉で事業を進めてきた方針の結果、会則の不備、準会員制度の未解決、新設国立医科大学図書館の問題、ネットワークの再編成、メドラス対策の未処理等の問題が山積されている。即ち、前半の強力な指導体制と違い何等新しい指導体制が生まれないままの時代でもあったといえる。

日本医学図書館協会は近い将来加盟館数が100館になることは目前にあり、今こそ強力なリーダーシップをとる体制を待ち望んでいる医学図書館員が如何に多いかを痛切に感じる必要がある。このことは創立50年とかではなくすべての医学図書館員が考えることではなからうか。現代の安易なサラリーマン化された図書館員にはわからないと思うが創立当初苦勞された日本医学図書館協会の先輩諸兄に対して新ためて敬意を表する次第である。本年創立50周年を迎えるにあたって我々は何のために過ぎ去った半世紀を振り返ろうとしているのか現在まで先輩諸兄がきづいたこの日本医学図書館協会の時代に即応した

漸新な計画のもとに運営してゆくべきである。

我が国の図書館史の中で、日本医学図書館協会の50年は風にそよぐ草であったかも知れないが、これからどのような未来に向かって進むべきかは加盟館の1人1人の図書館員が考えてこそ、未来への可能性を示してくれるであろう。

付 表

1. 医学図書館員教育

第3計画 医学図書館員研究集会

第1回	昭和41年	東北区・九州区
第2回	昭和42年	東北区・九州区
第3回	昭和43年	東北区・九州区
第4回	昭和44年	北海道区・中四国区
第5回	昭和45年	北海道区・中四国区
第6回	昭和46年	北海道区・中四国区
第7回	昭和47年	東海区
第8回	昭和48年	関東区
第9回	昭和49年	関東区
第10回	昭和50年	関東区
第11回	昭和51年	近畿区
第12回	昭和52年	近畿区

医学図書館員セミナー

第1回	昭和49年	大阪地区
第2回	昭和50年	北信区
第3回	昭和51年	東海区
第4回	昭和52年	東北区

2. 出版物

日本自然科学雑誌総覧	(1968)
医学雑誌総合目録欧文編第5版	(1969)
図書館ルーティン・ワークの総点検	(1970)
Index Medicus の使い方	(1971)
医学雑誌総合目録と文編第5版	(1972)
Excerpta Medica の使い方	(1974)
Index Medicus の使い方〔改訂版〕	(1976)
相互貸借マニュアル	(1976)
医学雑誌総合目録欧文編第6版	(1977)

(昭和52年7月13日受付)